高校生がネット上における仲間内攻撃行動を目撃した際の行動(2)
ー加害者との関係性別の集計結果ー

○熊崎あゆち[1]・橿淵めぐみ[2]・堀内由樹子[1]・鈴木佳苗#[2]・八巻龍#[2]
（[1]お茶の水女子大学　[2]筑波大学）

問　題

RQ:ネットを介した仲間内攻撃行動に遭遇したとき、どのような行動をとるか

□ ネットを介した仲間内攻撃行動を目撃した人物と加害者との関係性

一連研究(1)に引き続き、(2)では、ネットを介した仲間内攻撃行動を目撃した時の行動と目撃した人物と加害者の関係性の関連について検討した。

方　法

□ 対象者

一連研究の(1)と同様であった。

□ 測定項目

①目撃者の行動経験

一連研究の(1)と同様であった。

②加害者との関係性

ネットを介した仲間内攻撃行動を行った人物との関係性について「あなたがよく話す子」、「あなたが時々話す子」、「あなたがほとんど話をしない子」、「誰がしたかわからない」の4項目で尋ねた。

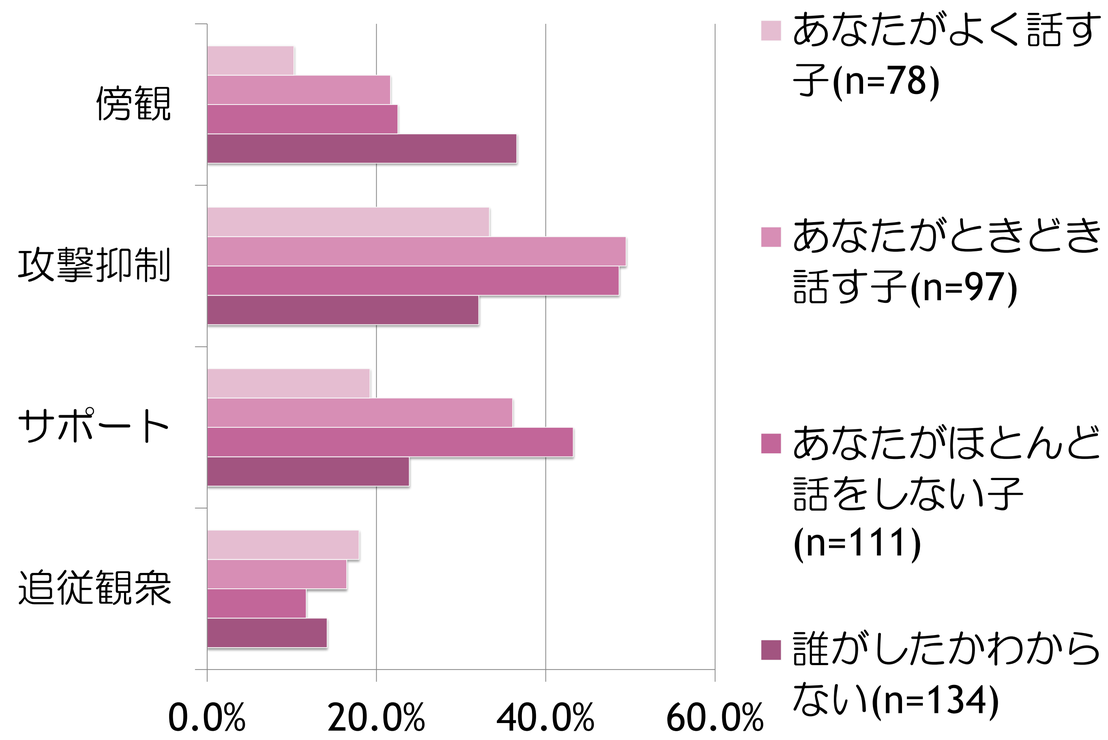
結　果　と　考　察

『追従観衆行動』：攻撃行動への参加や扇動を行う
『サポート行動』：被害者に対する慰撫を行う
『攻撃抑制行動』：攻撃の制止や仲裁を行う

3つの行動カテゴリに当てはまる行動リストを、5種類の攻撃行動の種類別に作成した。この行動リストのそれぞれについて経験の有無を尋ね、カテゴリ内の行動のうち1つでも「経験有り」の場合に当該行動カテゴリの「経験有り」とした。

3つの行動カテゴリのいずれも「経験無し」の目撃者のうち、「特に何もしていない」と回答した場合を『傍観行動』の「経験有り」とした。

各行動の経験率を加害者との関係性別に集計した結果を図1に示した。



□ 追従観衆行動(攻撃行動への参加や扇動を行う)

他の行動に比べ、加害者との関係性による変化が小さかった。また、被害者との関係性に関わらず一定の経験率であった(一連研究(1))

追従観衆行動には人間関係よりも攻撃性など個人の特性が関連している可能性。

□ 傍観行動(加害行動について特に何もしない)

➢ 加害者が「よく話す子」の場合に経験率が低い。

関係がきわめて近い場合には、その他の行動と比べて傍観行動は選択されず、何らかの行動を取ることが友人関係の中で求められていることが示唆される。

➢ 傍観行動は加害者が不明な場合に多い。しかし、一連研究(1)で被害者が不明な場合には傍観行動の選択率が顕著に高かったのに対し、本研究での加害者が不明の場合の傍観行動選択率の上昇は比較的低かった。

傍観を選択するか否かは、加害者との関係性よりも被害者との関係の遠さが大きく影響すると考えられる。

□ サポート行動、攻撃抑制行動

➢ いずれも、加害者が「よく話す子」の場合に経験率が低下していた。

これは、加害者との関係がきわめて近い場合には、加害者の心情に配慮して結果的に被害者を援助するような介入行動をとりにくいためと考えられる。

➢ 加害者との関係が近いことに伴う攻撃抑制行動の経験率低下の幅はサポート行動の低下幅に比べ小さかった。

・攻撃抑制行動には加害者のみに働きかける制止や加害者と被害者の両者に働きかける仲裁が含まれ、加害者との関係性が必要となる行動である。
・加害者との関係がきわめて近い場合には、被害者のみに働きかけるサポートよりも仲裁や制止を含む攻撃抑制行動の方が、むしろ行いやすい可能性が考えられる。

総　合　的　考　察

本一連研究によって、被害者/加害者との関係性と目撃者の行動との間の関連性が示された。

被害者との関係性

被害者との関係性の近さによって行動の経験率が段階的に増減する傾向があった(一連研究(1))

加害者との関係性

加害者との関係性がきわめて親密な場合とそうでない場合との間で違いが際立っていた(本研究)。

本研究は最先端・次世代研究開発支援プログラム「ネットいじめ研究の新展開ー「行動する傍観者」を生み出すプログラムー」（代表：鈴木佳苗）の助成を受けている。